
サンドバッグの夢を見た

游太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンドバッグの夢を見た

【Zコード】

N8762M

【作者名】

游太

【あらすじ】

サンドバッグにされた男の子と、サンドバッグになりたい男の子の話。

アキラに初めて会った時のことば、今でも忘れられない。
忘れてても忘れることが出来ない。忘れるわけにはいかない。
忘れてたまるか。

伯母に手を引かれてやつてきたアキラは、それはもう児田麗しい
お子様だった。きらきらでにこにこだつた。

伯母から離れたアキラは俺の隣にちょこんと座った。えへ、と愛
らしく笑つたりもした。

あきらくんと仲良くするのよ。

みーくん、あきらをよろしくね。

はい。

俺たちは良い子の返事をして、子供部屋を出て行く母親、Sの背
中を一人で見送った。

そこまでは良かった。そこまで良かつた。

ぱたん。

世界が遮断された音。

その瞬間、扉の裏に貼つてあったキャラクターもののカレンダー
が、ものすごい勢いで左に傾いだのを覚えている。

ドロップキックをかまされたのだった。

+ - + - + -

アキラはとんでもなく強かつた。

あの細腕のどこにそんな力が隠されているのか今でも謎だ。しかも見た目は王子様だ。きらきらでにこにこだ。「ぼく虫も殺せません」みたいなオーラを身に纏いながら平氣で拳を落としてくる。こちらが無抵抗でもお構いなしだ。

きらきらにこにこぼかすかぼかすか。もうなにがなんだかわからない。

半べそかいて歯をくいしばって耐えるばかりだった俺がようやく反撃を思い至った時には、アキラは手どころか足も頭も出していた。アキラは可愛い顔して石頭だった。

アキラはなかなか賢かつた。

訂正、かなりずる賢かつた。アキラは俺と自分以外の誰かがいる場所では絶対に手を出さなかつた。

あれは一種の超能力だと思う。まるでスイッチでも入ったみたいに、一瞬にして消える表情。怖いくらいにぴたりと動きを止める腕。掴み上げていた俺の胸倉をぱっと放して、乱れた服をちょいちょいと直して、その場にすとんと座り込む。

その豹変ぶりにこちらが目を丸くしていると、こんこんと扉が叩かれおやつとジュークを持つた母親が顔を出すのだった。

伯父夫婦も俺の両親も、アキラの奇行にはまったく気づいていかつた。アキラは実際に周到だった。俺の身体に痣をつくるくらい程度には加減していたらしい。

証拠は一切残さない。それがアキラのやり方だった。

アキラが嫌いだった。

強いし。めちゃくちゃ強いし。ぜんぜん敵わないし。そしてなにより楽しそうだし。それが一番気に食わなかった。

ぽかすか殴りながらアキラはすつと笑っていた。あはははは、声を上げて笑っていた。なにがそんなにおもしろいんだ、といってみるばかり。俺がムキになるとますます笑った。だつてたのしーんだもん、ばかっていったほうがばかなんだよばかー。ぽかすかぽかすか。

+ - + - + -

「あ、そうだ。ねーねー＝コトー」

僕の座布団になっていた＝コトは答えなかつた。手足をじたばたさせて悔しそうにうつむいてる。

座布団が動いたら、ジューースが飲めないじゃないか。

「ねーあこひつてばー」

＝コトはまだじたばた動いてる。最近わかつたことだナビ、＝コトは意外と諦めが悪い。＝コトのぶんのおやつは手が届きやうで届かない最高のポイントに置いてあるから、いぐり手足をばたつかせたつて無駄だ。これも最近わかつたんだナビ、＝コトは意外と頭も悪い。

「きのーね、＝コトの夢みたんだよー」

勝手に話を進める」とした。反応は無いけれどちゃんと聞いてるはずだ。聴いてるはずだ。

諦めも頭も悪いけど、＝コトは優しい子だから。

「＝コトがねー、僕たちの玄関のトコに立つてねー」

「……アキラさんが知らないよ」

「夢だつて言つてゐるじゃん。夢だからなんでもありなんだよ」

べちゃん。

「えつと、どうまで話したつた。//コトがバカ言つからわからなくなつちやつた」

「…………おれのせこじや」

ばちゃん。

「あーへつだ。//コトが玄関の前に包丁持つて立つてー」

あれ、変な空氣になつた。なんでだろ。

//コトはぐるつと首を巡らせて僕を見る。おかしな眼をしていた。驚いてる? 怒ってる? よくわかんないよ//コト。変なの。

僕は笑つてゐるよ。見てわかるよね?

「でねー、ほくの」と、ぶすーって!」

//コトはきよとん、とした顔のまま黙つているだけで、僕が思つ

よつな面白に反応を返してはくれなかつた。

つまんなにな。

おばさんは手作りのクッキーを持たせてくれた。またきてね、つて笑つて言つた。はあい、と僕も笑つて返す。

おばさんがほんとうは僕のことをどう思つてるか、なんてそんなむずかしいことはわからぬ。ひょっとしたら僕が帰つたあとでいつも「もつあの子はおうちに呼んじゃいけません」なんて//コトに言つてゐるのもしれない。//コトはなんて返してゐるんだろう、「うんもうぜつたい呼ばないでもあいついつも勝手にくるんだ」、たぶんこんな感じだと思つ。

カタチだけのあいわつ。そんななかでも「口」はいつも直で正直だ。おばさんのカゲに隠れて僕のことをじーーっと睨んでる。よくわかんないけど、「オヤのカタキでも見るよ」の「眼」ってこのうのをいうんじゃないかな。

でも、今日ははちよつと違ひがする。なんだかしょんぼりしてる気がする。らしくない。

そんなんじゃ、「僕を玄関で待ち構える」「口」にはいつまでたつてもなれないじゃないか。つまらない。

今日もうちには誰もいなかつた。

僕を待つてたのは茶色いお札が何枚かと「きょうもおそらくります」の紙が一枚だけ。

「口」ではない。包丁もない。
だれもいない。

いつになつたらきてくれるんだね。いつかはきっとしてくれるんだろう。ぼくのことしかかんがえていないだれか。ぼくのことをかんがえてくれてるだれか。

ぼくのことを、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8762m/>

サンドバッグの夢を見た

2010年10月9日06時12分発行